

2026.01.25.

「言葉が通じる幸い」

旧約 創世記11章1～9節

新約 使徒言行録2章1～6節

1. はじめに

一月最後の主の日ですので、旧約から御言葉を受けます。創世記の11章です。ここは小見出しが「バベルの塔」とあります。この話はとても有名で、多くの芸術家のイメージを喚起させ、たくさんの絵も描かれてきました。皆さんも良く知っておられる話です。

さて、この話は創世記において、1章にあります天地創造からこの11章までを「原歴史」と呼び、12章のアブラハムが出てくるところ以降とは区別して理解します。この「原歴史」と言いますのは全ての歴史はここから出てくる、歴史の大元と理解すれば良いでしょう。色んな細胞になることが出来る幹細胞のようなイメージでしょうか。いわゆる歴史時代に入る前の話です。そこには世界も人間も神様に造られた。その人間は神様に罪を犯し、その罪は深く広く全ての人に及んだ。神様はそのような人間を洪水をもって裁かれたけれど、ノアとその家族は生かされました。そこから人類の再出発が始まり、神様はその再出発した人類をノアの洪水のようなあり方で滅ぼすことは二度としないと約束されました。神様はその「しるし」として虹を置かれた。では、ノアから始まった人間は罪とは関係ないような、無垢な人々であったかと言えば、そうではありませんでした。そうして、12章からアブラハムと神様の関わりの中での歴史世界が始まります。この歴史世界が始まる直前に、このバベルの塔の話は置かれています。それは、アブラハムから始まっていく神様と人間との関わりにおける歴史世界は、ノアから新しく出発をした人類によって營まれていくけれど、この世界は言葉はバラバラで、互いに心を通じ合わせることが出来ない世界だ。そのような世界の人々に対して、神様はアブラムを選び、神の民として関係の再構築をしていき、そこから全ての民を救いへと導いていく。そのような神様の救済の御業の中に、人類の歴史はある。バベルの塔の話は、そのような私共が生きている現実の世界、罪に満ちた世界、それがどのようなものであるのかということを告げると同時に、それがゴールではないということも聖書は告げているわけです。

このバベルの塔の話は、原因譚の一つと言われます。原因譚という言葉は馴染みがあまりないかもしれません。原因譚の譚という字は言偏に「西」の下に「早」いと書くのですが、お話、物語という意味です。つまり、原因物語ということです。日本昔話の中に「こうして、この池は竜神池と呼ばれるようになった」という、どうしてこの池が竜神池と呼ばれるのか、その原因となった話、それを原因譚と言います。このバベルの塔の話は、世界中に様々な言葉がある、この現実に対しての原因譚となっているわけです。勿論、この話は聖書の話ですから、単なる原因譚ではありません。

そこには、言葉が通じないという現実の中に潜む人間の罪ということがはつきり示されています。順に見ていきましょう。

2. 文明（メソポタミア）の誕生

1節「11:1 世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。」と始まります。これは歴史世界が始まる前のことですから、そのような時代があったのかと考えるのは意味がありません。この状態が続いているれば、私達は外国語を学ぶ必要もなかったわけですが、そんなことを考えても仕方ありません。しかし、この話のモチーフはメソポタミア文明から来ていると考えて良いでしょう。「11:2 東の方から移動してきた人々は、シンアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。11:3 彼らは、『れんがを作り、それをよく焼こう』と話し合った。石の代わりにれんがを、しつくいの代わりにアスファルトを用いた。」と続きます。この「シンアル」という土地がどこのことを指しているのかは分かりませんけれど、大まかに言えばメソポタミア地方と考えて良いでしょう。それは「れんが」を作り「アスファルト」を建築用材として用いたということから類推できます。メソポタミアは古代文明が発達した地域です。この地方には、石を採掘するところがあまりありません。しかし、泥はいくらでもあります。そこで「れんが」を作ることになります。同じ大きさ、同じ形のれんがを大量に作るわけです。そしてアスファルトですが、これは原油が湧いていて揮発成分が蒸発してアスファルトの池と言いますか沼と言いますか、そうそうものがこの地方にはありました。今でもあります。そこを掘れば油田になるのでしょうか、そのような発想も技術もまだありません。しかし、この二つを手に入れることによって、人類は巨大な人工の建造物を作れるようになったわけです。これによって頑丈で大きな家も出来ますし、町も出来ます。人々も集まつてくる。言葉も通じるし、交易も盛んにされるようになったでしょう。文明が栄えていくのは、容易に想像できます。このバベルの塔はジグラットウと呼ばれる、メソポタミア地方にあった神殿をイメージしていると考えられています。このジグラットウの中には一辺がが 90 メートル、高さ 90 メートルにも及ぶものがありました。これほど巨大な構造物を作れるほどの文明が成立していった。そして、それはどのような意味があるのか？ちなみに「バベル」というこの町の名前は、ヘブライ語の（混乱）という意味の「バラル」から来ていると告げられていますが、この町は「バビロン」であると考えられています。

3. 文明が内包する罪

さて、この町で何が起きたでしょうか。4節「11:4 彼らは、『さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう』と言った。」とあります。文明が栄えれば、遠くからも見える高い塔を建てたくなる。これは、いつの時代でも同じです。現

代でも東京スカイツリー (634 メートル) を作ったり、ドバイには世界一高いブルジュ・ハリファ (829.8m) というビルが作られたりします。どうして、人はそのような高い建造物を作るのかと言えば、必要だからということもありましょうけれど、それだけではないでしょう。「自分たちはこんな立派なものを作れるほどに大したものだ」と人々に誇りたいからでしょう。昔のお城もそういう面があつた。有名なりたい、人々に称賛されたい、自分の力を見せつけたいからです。そして、ここにはもう一つ注目すべき言葉が記されています。それは「天まで届く塔のある町を建てて」と言われていることです。天とは神様がおられるところです。つまり、「天にまで届く塔を建てる」とは、自分たちが神様のようになる、神様のように人々からあがめられ、神様のように自分で何でも出来る者になる。さらには、神のように人々を支配する。そんなニュアンスもあるのではないかと思います。ここには、人間の作り上げていく文明というものに対する強烈な批判があります。私共は文明がどんどん発達していくことは素晴らしい。世の中が便利になって、豊かになって、宇宙にまで行けるようになって、悪い事なんて何もない。そう思われるかもしれません。しかし、聖書はそうは告げていません。文明の発展の裏に「神のようになろう」とする罪が潜んでいる。そのことを告げています。

4. 言葉の混乱 ①神様の裁きとして

神様はこの罪を放っておかれませんでした。5～7節「11:5 主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、11:6 言われた。『彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。

11:7 我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。』』 とても面白い言い回しです。一つの民で一つの言葉を話している。これでは彼らが何を企てても、妨げることは出来ない。神様さえも妨げることが出来ないほどに、とんでもないことをやりかねない。だから、神様は言葉を混乱させて、互いに言葉が通じないようにされたと言うのです。

この話が、世界中にたくさんの民族がおり、おびただしい言語があることに対する原因譚として読めば、「へーっ」と言っておしまいです。しかし、バベルの塔は単なる原因譚ではありません。ここには文明というものに対する強烈な批判があります。文明が進んでいく中で、自らが神のようになろうとする罪が露わに現れてくると見ているわけです。現代の私共においてもそれは同じです。一番分かりやすいのは原爆でしょう。産業革命以降の急速な鉄とコンクリートの文明がたどり着いた先にあったのは、原子爆弾だった。原子爆弾を生み出す文明というものに対して、単純に諸手を挙げて歓迎することは出来ないのでしょうか。その文明の根っこには、「自分が神のようになろうとする罪」がある。人はその文明を用いて自らの栄光を求める、周りの者たちを支配し、

自分にひれ伏させていく。文明とはそういうものだと告げているわけです。最近は、A I というものを発展させ、多くの人間の仕事をロボットが担う時代も夢物語ではなくなってきています。また、兵器も人間が扱うのではなく、A I によって瞬時判断されるようになっていとも聞きます。どんな社会になっていくのか、不安にもなります。しかし、人間の文明というものは、一度歯車が回り始めたら、誰も止めることは出来ません。どんどん前へ前へと進んでいきます。その競争に負けることは、自分が支配される側になってしまうことを意味するからです。だから、誰もが相手より先に発見し、発明し、それを用いて支配しようとします。科学も産業も経済も、その歯車の一部になっていきますし、なっています。それがバベルの塔の話が私共に告げている「文明社会が持つ罪の現実」です。

5. 言葉の混乱 ②私達の現実

さて、もう一つこのバベルの塔の話が私共に告げている現実があります。それは、言葉が通じないという現実です。それは、私共にとって外国語である英語・フランス語・ドイツ語・ベトナム語と言った外国の言葉が分からず、外国語を話す人と言葉が通じないという事実です。しかし、この言葉が通じないという現実は、同じ日本語を話す人たちとの間で通じないという、もっと深刻な現実を私共に告げています。これのとても分かりやすい例が、現在始まっている 2 / 8(日)に行われる衆議院の選挙のためのそれぞれの候補者や政党の主張です。互いに相手を批判しますけれど、その言葉が相手に通じることはありません。お互いにです。どうしてかと言えば、お互いに「自分は正しい」「相手は間違っている」と信じているからでしょう。そして、相手をやっつけたい。これでは言葉は通じません。しかし、このようなことは、夫婦や親子や兄弟のような私共にとって最も親しい関係の中においても起きます。言葉が通じないというのは、心が通じないということです。それはとても辛いことです。しかしそれは、たとえ自分で自覚していないくとも、その根っこには「自らが神になろうとする罪」があるからです。私は正しい、私は間違っていない、あなたは私に従いなさい、などと内心思っていれば言葉は通じませんし、相手の心を受け止めることも出来ません。しかし、往々にしてこのような状況に私共は置かれているのではないでしょうか。そして、このような状況は個人対個人という関係で起きるとは限りません。グループ対グループ、団体対団体、国家対国家というレベルにおいても起きます。私共が生きている現実は、このように言葉が通じないという現実に幾重にも取り囲まれている状況にあるのではないかでしょうか。私共は「話せば分かる」と軽く考えていてるところがありますけれど、「話しても分かってもらえない」「聞いても分からぬ」ということが、決して少なくない。それが私共が生きているこの世界の現実です。

6. 言葉を通じさせるために

では、私共はどうすれば良いのでしょうか。ずいぶん前の本になりますが、エーリッヒ・フロムという方が書いた『愛するということ』という本があります。原題は「The art of Loveing」です。愛するということは、学ばなければならない技術なのだとというのです。放っておいても人間は自然に愛することが出来るようにはならないと言うのです。愛するためには、様々なことを学ばなければならない。何故なら、人は自分の考えや生き方が当然だと思っているし、しかし相手もそう思っている。とすれば、そこで相手の言葉を聞き、また自分も相手に伝わるような言葉で思いを伝えなければならない訳です。その営みを自覚的に、必ずやらなければならないのが結婚です。私は結婚式も行いますけれど、その前に5. 6回の準備会を行います。聖書における結婚の理解と実践的な結婚のカウンセリングのようなものです。これがどうしても必要だと、私は考えています。誰も教えてくれませんから。

7. ペンテコステの出来事

聖書に戻りますが、そもそも、聖書はこのような言葉が通じない私共の罪の現実を告げているだけなのでしょうか。それならば、どこに希望があるでしょう。私共の罪と文明というものが結びついているのであれば、私共はこの文明というものを捨てなければならないのでしょうか。そんなことが出来るでしょうか。電気のない生活、スマホのない生活、車のない生活に戻れるでしょうか。そもそも、聖書が告げているのは、この罪の現実だけなのでしょうか。そうではありません。先ほど使徒言行録2章1～6節を読みました。これは、イエス様が十字架にお架かりなられ、三日目に復活し、40日後に天に昇られ、そして10日後に弟子たちの上にイエス様の靈である聖靈が注がれたときのことが記されています。いわゆるペンテコステの出来事です。この時何が起きたのかと言いますと「2:4 すると、一同は聖靈に満たされ、“靈”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。 2:5 さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、 2:6 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。」ということです。弟子たちはガリラヤの人です。他の国の言葉など話せるはずもありません。しかし、彼らは「当時の人たちが考えている全世界」から来ていた人たちに、その人の故郷の言葉で話し始めたのです。それは、言葉が通じないという現実に生きている人たち、その人達に「互いに言葉が通じる世界」が開かれたということです。聖靈なる神様によって開かれたということです。この聖靈なる神様によって与えられた新しい救いの現実は、自分が神のようになってしまう罪の中から、私共を神様の赦しの中へ、神様の恵みの中へ、互いに言葉を通わせ、心を通わせ、神と人とに仕える道へと導いてくれます。これがイエス様の十字架・復活・昇天・ペンテコステという救いの御業によって、私共の前に新しく開かれた世界です。神様はこの言葉が通じないという罪の世界に愛する独り子を送ってくださり、その十字

架の血によって、私共の一切の罪を赦してくださり、神様を神様とし、神様をあがめ、畏れ、敬い、神様との親しい交わりに生きる道を開いてくださいました。そして、私共はその世界に招かれ、その恵みの中に生かされていることを知らされ、その新しい命に生きること学び、新しい自分へと変えられ続けていきます。そして、神様がそのような場として与えてくださったのが、キリストの教会という所です。ここで、私共は言葉が通じる、心が通じる、その恵みを味わっていきます。それは、聖靈なる神様によって与えられた新しい命が、私共の中で息づいていくことです。使徒達がペンテコステの時にそれぞれの言語で語ったことは、神様の救いの御業であり、イエス様が十字架にお架かりなり復活されたこと、そしてイエス様が救い主であることでした。神様・イエス様を讃め讃え、この方こそ「まことの神」であることを告げるとき、私共の言葉は通じるようになります。自分が神のようになるところから離れるからです。

8. 言葉を通じ合わせて

この地上で生きていく以上、私共はなお言葉が通じない、心が通じない。そのような現実の中を歩まなければならぬことがあるでしょう。また、そのような出来事に何度も出会い、心が折れそうになってしまふことがあるかもしれません。しかし、私共は知っています。それが決して変わることのない世界ではないということを。この世界は、神様の救いが完成する御国へと向かって歩んでいます。私共はそこに向かって、すでにその恵みに与っている者として歩んでいきます。私共の唇には、神様・イエス様への賛美と感謝と祈りが備えられています。それは聖靈なる神様の御手の中に、新しい命の中に私共が生かされているからです。ありがたいことです。ですから、隣り人の関わりにおいては、互いに愛し合い、支え合い、仕え合って、言葉と心を通じ合わせてまいりましょう。これが、神様によって与えられたキリスト者の健やかな歩みというものだからです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

今朝もあなた様の御言葉を通して、私共の中にある罪、この世界に溢れている罪の現実を教えてくださいました。そしてまた、イエス様の十字架によって、私共がその罪の縄目から救い出され、神の子・僕とされていることも教えてくださいました。ありがとうございます。私がいよいよ心を通わせ、互いに通じる言葉をもって愛の交わりをここに形作っていくことが出来ますよう、心から祈り願います。私共は目に見えるものを手に入れることによって、豊かになったような思いになりますけれど、本当の豊かさはあなた様の愛の中にあることを知り、あなた様と共に歩むことが出来ますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン